
魔法少女 まじかるやもり - おそらのうえのものがたり -

薫野 一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女 まじかるやもり - おそらのうえのものがたり -

【Nコード】

N0201W

【作者名】

薫野 一

【あらすじ】

* おそらのうえの、おはなしです。 *

科学が発達し、魔法が衰退した地上の都市。そこを対を成す、魔法が発達し、科学が衰退した天空の都市。そこに現れる怪物を日々退治しているのが、魔法を使う 少女少女。

しかし、怪物達は日に日に増え、都市を荒らす。荒廃し続ける都市を救うため、ある少女少女が立ち上がった。都市を救うため、皆の笑顔を守るために。

このお話は、とある少女と、その周囲の少女少女達が描く、魔法の

ブローグ

いつだっただろう。ある日、わたしは魔法少女になった。みんなの笑顔を守るために。誰かの幸せを、壊さない為に。この都市を壊す、怪物達を倒す為に。みんなに希望を、届ける為に。

そんなわたしに、昨日魔法少女ギルドから一通の手紙が来た。なんでも、都市を破壊し回る強力な怪物を倒して欲しい、という依頼。普通はこういう依頼が自宅まで届くことはなくて、緊急時や、最上級クラスの魔法少女にしか届かないと聞いたことがある。ような気がする。

今回、この依頼が届いたということは、わたしが最上級クラスの魔法少女になったということなのかもしれない。……と思ったけど、そんな訳もなく、緊急時、というだけだと思う。がっかりしつつも私服に着替え、わたしのベッドに寝ている小さなパートナーの頭を引っ掴んで外へと飛び出す。「むぎゅっ」なんてパートナー　マギカが言った気がするけど、気にせずにギルドへと駆ける。

大概、こういう時はギルドへ行って、仲間を集めてから出発しなきゃあいけないらしいから。手紙にそう書いてあった。

仲間を集めるの、面倒だなあ。……なんて考えを消して、ただひたすら、ギルドへ向かってわたしは走り続ける。

ようやく、初めての大大物を倒せることに喜びを覚えながら。

第一話 希望と博愛と真実

走り続けて、ギルド到着。かかった時間は多分二分くらい。

ギルドの中を見回せば、魔術師ギルドから派遣されている人も居た。どうでもいいけど、魔法少女ギルドと魔術師ギルドでなんで二つに分けるんだろう。あと、魔術師ギルドってなんでその名前にしたんだろ。魔法少年ギルドでいい気がするのはいだけかなあ。なんて。知ってるよ、魔術と魔法が違うってことぐらい。

さて、と。みんながみんな、メンバーを探している中、わたしも探さなきゃな、なんて思いながらきよきよと周囲を見回していたら、左肩に革の感触がした。振り向いてみると、そこには一人の魔法少女。金髪碧眼の女の子。目をぱちくりさせていたら、その子が口を開いた。

「ね、あたしと組まない？ あんたのこと知ってるよ、あの守宮もりみややもりでしょ？」

驚いたよ、さすがに。だってわたしのこと知ってるなんて思わなかったんだもん。思わず口が開いたけど、慌てて閉める。……わたしってそんな有名だったのかな？

「あははっ、驚いてる。あんたね、結構有名な魔法少女だよ？ 悪い意味でも良い意味でも」

「……ほんと？」

「ホント。あたしは嘘つかないよ」

そう言って、可愛い子が笑う。笑った顔も可愛いなあ、なんて思ったり。……そっぴいや悪い意味と良い意味で有名ってなんでだろ。

「あんたね、ハイテンションでカオスなのが悪い意味で有名。んで、良い意味で有名なのは、あんたが類い稀なる素質を持った、希望の魔法少女だったこと」

「初めて知ったー」

「だろっねえ」

ハイテンションでカオスって言われるのはいつものことだから特に気にしない。うん、気にしない。それより何より、類い稀なる素質を持った希望の魔法少女。そのフリーズが、わたしの頭の中でリピートする。うん、わたし、勝ち組。

「よっしゃあ！ いいこと聞いた！ よし、んじゃあお礼に組むことを承諾しようじゃあないか！」

「くすくす、何様よ。まあいいんだけどさ。ありがとね。あたしは和泉^{かずみ}かさね。よろしく、やもり！」

「こつちこそよろしくね、かさねたん！」

金髪碧眼の魔法少女、もとい、かさねたんを仲間にできた！ なかなか強そうな子だから仲間に出て良かったなと思う。声かけてくれたのは向こうなんだけどね！

かさねたんの服は胸元を覆う赤い甲冑に、白いコルセット、白いミニスカート。右肩には青い肩防具。それに赤いロングブーツ。なんというか、こう、剣士……というよりはパラディン、って感じの服装。これがかさねたんの魔法少女コスチューム。とはいっても、このおそらのうえに居る限りじゃあ魔法少女コスチュームで過ごすだけ。

それと気のせいかしら、かさねたんの胸元に目がいくのは。わたしそっちの気はないと思うんだけどなあ。

「あと一人ぐらいは欲しいなあ。にしてもやもり、その髪、どうなってるの？ 右の方、サイドテールにしてある部分だけ赤いけど」

「あ、これかー。これね、地^じが緑髪^{りよくみ}だからサイドテールの部分くらいは赤色にしてみようかな、って」

へらへらと笑いながら答えると、「そうなんだー」とのんきに笑って返してくれるかさねたん。何故だろう、こんなやり取りでさえときめきを感じる。今まで一人だったからかなあ。んじゃあもう何も怖くないのかな。……あ、魔法少女の中ではもう何も怖くないはフラグだって言われてたの忘れてた。まあいいや。

……そういや、わたしのパートナーが居ない。そう思っていたら、

酒場の方にパートナーの影が見えた。後で回収すればいいや、なんて思ったから放置。さ、仲間探し。

*

良さそうな人発見。かつこよくて強そうな人がいた！ 面食^{めん}いであるやもりちゃん^めは食らいつく！ なんてね。面食いは事実^{じつ}だけど。そんなわたし、今はかさねさんに勧誘^{かんすい}を任せてるから、ギルドの酒場で待機^{たいき}してたり。今回^{こんかい}だけ何故^なか食い放題^{ほうだい}飲み放題^{ほうだい}。なんか、全部^{ぜんぶ}無料^{りよう}。フルーツの盛り合わせ食べてるんだけどこれがまた美味しい。ブドウおいしいよブドウ。

かさねたんが勧誘^{かんすい}から帰ってきたのか、お目当ての人物^{じんぶつ}を連れてこつちに向かつてきた。ちょうど食べ終えた皿^{しる}をカウンターに放置^{はち}し、ついでにパートナーも驚^{おど}掴^{つか}んで持つていつて合流^{がくりゅう}。勧誘^{かんすい}した人のお名前は月詠^{つきよみ}伊月^{いづき}くん。苗字^{ななざ}、すんげーかつこいいマジかつこいい。

「わたしは守宮^{しゅくぐう}やもりだよー！ よろしくっ！」

「やもりか、こつちこそよろしくな」

なんでだろう、礼儀^{れぎ}は正しいしかつこいいんだけど……どこことなく世の中の十四歳^{しじうさい}がよく患^{かか}う病^{びょう}に罹^{かか}っていそうと思^{おも}ったのはわたしだけでいいかも。腰^{こし}くらいまでの黒髪^{くろかみ}を結^{むす}ってて、青髪^{あおかみ}のメッシュ入^いってる。この時点で罹^{かか}ってそんな感じがする。ちよつと切れ長^{きりなが}な赤目^{あかめ}はドストライク。うん、はつきり言^いって、求婚^{ここん}したいぐらいかつこいい。そんなことを考えてたら、かさねさんに肩^{かた}を叩^{たた}かれた。

「やもり、もうすぐ行こうか」

「あ、うん。……そうだ、二人のギルド称号^{しごう}ってなに？ わたしは希望^{きぼう}の魔法少女^{まほうしょうじょ}だけど」

「あたしはね、博愛^{はくあい}の魔法少女^{まほうしょうじょ}。神々しさはやもりに負けるけど、響^{ひび}きはかつこいいよ」

「俺^{おれ}は……、真実^{しんじつ}の魔術師^{まじゅつし}、だな」

「くっそう、かつこいい……」

そんな、他愛も無い会話をしながら、出発準備をする。そろそろ出撃しなきゃあいけないらしい。どんなのが待ち構えているのかも楽しみにしながら、愛用武器であるピコピコハンマーを召喚する。

召喚ってなんかかつこつけてる感じだけど。出すのは簡単で、右足で軽く地面を蹴るだけでぽんっ、と飛び出てくる。新米の頃は簡単ながらも出すのに手間取ったけど、今じゃあもう当たり前。

さて、わたしの初の大物。無事に倒せるかなあ……。

第二話 初めての大量、その名はキャピタルイーター

わたしの、初めての、大量。これがもしも、もしもわたし達が倒せたのなら それは、偉業いぎようを成し遂げたも同然なんだ。緊急要請が出るほどに強い大物なだから、それはそうだろう。わたし達が倒せたらいいなあ。よほど強くないと駄目いづきなんだろうけどさ。

そんな事を思いつつ、かさねさんと伊月いづきくん「それじゃあ、行こうか」と声をかけてみる。わたしなりの、明るい笑顔を浮かべながら。

「おっけー、あたしの準備は万全！」

「俺も、不備はない」

「そんじゃあ、れつつごー！」

二人と一緒に、怪物の暴れ回る場所 魔界地区まかいちくへと飛んでゆく。魔法少女だとか魔術師は必ずといっていいほど飛べるものを持っている。例えば、箒ほうだとか、たまには掃除機とかで飛ぶ子も居るし。ちなみにわたしの飛べるものはお星様だったりする。ワープスターみたいなね。

魔界地区へ向かっている間は各自パートナーと相談してたりするみたい。わたし達以外の魔法少女はそうしてる。まあでも、ノープランでも平気でしょ。突っ込んでいって喰らったら喰らったで仕方ないし。要はゴリ押しすればいいんだよ。怪物さんとのスキンシップ。

「やもり、本当に大丈夫かい？」

「大丈夫だよ、のーぷろぶれむだよ！」

「大丈夫じゃなさそうな気がするんだけど……まあ、君みたいな素質ある魔法少女になら楽勝かもしれないよ」

よっしゃ、マギ力にさえ認められるわたしって凄い。……調子乗っちゃ駄目だ、何度そのせいで失敗したことか……。慎重に、かつ大胆にいかなきゃなあ。

なんて思ってるのも束の間。すぐに、怪物のもとへとたどり着いた。

……予想はしてただけど、予想以上に、遥かに、……大きい。街を文字通り喰らい尽くすその名前は　キャピタルイーター……なんていう名前だったはず。依頼手紙の内容そこまで読んでないから覚えてない。

「やもりー、あれ倒せるかな？　うちの妖精にも聞いたんだけど」「だいじょーぶだよ、かさねさんと伊月くんとわたしなら楽勝だって！」

かさねさんの言葉に笑顔でそう返すと、わたしは星に乗ったままキャピタルイーターの側まで行き、ハンマーを振りかざす。大きなピコピコハンマーで何回叩いても、怪物はぴくりともしないまま。他の魔法少女達の攻撃が加えられれば、少しずつぼろぼろになっていくぐらいだけど。見た目としてはもうホントにぼろぼろで、もう既に死んでいるんじゃないかと思えるぐらい。……だけれど。怪物がその手らしきものを横に薙ぎ払い、その手に当たり、吹き飛ばされる。おなかの辺りが凄く痛い。

壊れた建物の壁に叩きつけられれば背中に激痛が走る。傷口に塩を塗られたような感覚。それでも、めげずに再び星に乗って、ハンマーで怪物の頭をなんども叩く。そこで重要なことに気がついた。一度も、魔法を使ってない。

それはさすがにまずいと思いつつも、打撃を与え続ける。怪物の肩のほうにかさねたんが見えた。かさねたんは剣をめいっぱい、怪物に突き刺している。それを見て、わたしは怪物から少し離れたところに行き　魔法で作った光の矢を、怪物に向けて放つ。他の魔法少女達の攻撃もあってか、だんだんとぼろぼろになっていく怪物、キャピタルイーター。

他の魔法少女達に負けぬよう、魔法を使っては殴りを繰り返す。なんともなんとも。十回以上それを繰り返したところで　怪物がこちらのほうを向いた。わたしの方を、怪物がその赤い瞳を光らせ、

見つめる。人のかたちをした、人でないそれは、わたしに向かつて突っ込んでくる。回避しようとして、失敗した時　伊月くんがわたしの前に出て、その怪物を撃ち抜く。銀色の長い銃を使って。わたしには型？　みたいなのがわからないから、なんの銃かはわからないけれど。そして伊月くんは、わたしの方を見て　言う。

「一番弱ってる今がチャンスだ。お前のその魔法でトドメをさせるかもしれない」

その言葉に、口元に笑みを浮かべて、頷けば　銃により怯んだ怪物の目の前に行けば、魔法を使ってみせる。

「これで……これでトドメだあああつ！！」

大声でそう叫べば、右手を空に向けて上げ、一気に下へと振りかざす。そうすると　空から、たくさんの星屑が怪物へと向けて、降り注ぐ。その星屑の雨に、ぼろぼろの怪物は苦しそうに悶えながら　消えていく。その姿を薄れさせながら。

……あれ、ほんとにトドメがさせた……？

そう思い、しばらくぼかんとしていれば、周りからの拍手の音。その拍手に顔を赤くさせつつも、ガッツポーズをする。初めての大物に、トドメをさせたことが、凄く嬉しくて。伊月くんも側に寄って、微笑みながら拍手をしてくれて。かさねたんも慌てて側に来て、笑顔で抱きついてくれて。

「やもり、おめでと！　……お手柄横取りされちゃった感じだけど、嬉しいよ！」

「ありがとう、かさねたん！　うんと、その……ごめんね？」

「いーよいよよ、そんな気にしないことにするから！」

そう言って笑いあいつつ、抱きしめ合う。お互い喜びながら。伊月くんからも、お祝いの言葉がかけられる。

「おめでとっ、よくやったじゃないか」

「うっん、伊月くんが教えてくれたから！」

なんて、照れながら言えば、かさねたんに余計強く抱きしめられる。更には頭を撫でられて、へらへらと笑いながら抱きしめ返す。

とにかく喜ぶわたし達。そんな中で、かさねたんが伊月くんに一言。
「アンタ、言つとくけどやもりはあたしのだかね！」

「……いきなり何言うんだ」

かさねたんの発言に少し顔を赤くさせて少しそっぽを向いた後、
「ありがとう」と言って笑う。そんなわたしの頭を、かさねたんは
悪戯っぽく笑いながら無でまわす。……なんか、すごく嬉しい。
言葉にできないぐらいに、嬉しかった。拍手が響く中、ギルドから
の放送が地区の中心のスピーカーから流れる。

『討伐完了を確認しました。すぐにギルドに戻ってきてください』
そんな放送を聞けば、わたしたちはギルドへと帰還する。途中、
何人かの魔法少女に話しかけられながら。

*

「えーっと、君は確か守宮やもりだったね。……こほん、ここに第
千七百七十七回目の、魔法少女ギルド栄誉魔法少女として認定し、
上級魔法少女としての称号を授与する！」

その言葉が告げられると同時に、歓声がわきあがる。おめでとう、
だとか、すごい、だとか、いろんな声が聞こえる。

こうなったのもギルドに帰って来た時に、ギルド創始者さんに呼ば
れたからんだけど　まさかそれが、称号授与しゅうよの為だとは思わな
かった。「ありがとうございます！」と言って酒場に居るかさねた
んと伊月くんの所に戻れば、意外そうな顔をされた。

創始者さんの名前は知らない。年齢は多分、千は超えてるんじゃないの
かな。魔法を使つてれば老いないだろうし、この都市じゃあ
普通のことみたいない感じだし。

そんな事を考えていればかさねたん背中をべしべしと叩かれる。
「いやー、アンタ凄いいね！……にしてもさ、アンタまさかのまさ
かで中級魔法少女だとは思わなかったわ。既にあたし達とおんなじ
上級だと思つてた」

「俺も驚いたな。これからもつと成長すれば、この場所の歴史を覆すような魔法少女になれるかもしれないな」

「そ、そんなことないよ！」

あはは、と苦笑いしながら言う。顔が熱い、多分顔真っ赤かも。なんて、フルーツ盛りを食べながら思う。酒場の食べ物がこれから半永久的にただらしい。心の中で思い切りガッツポーズをしたのは秘密だけだね。フルーツ盛りがこれから食べ放題だからね、そりゃ喜ぶよ。

キウイ、林檎^{りんご}、オレンジ、パインと食べていると、かさねたんに耳打ちをされた。

「ギルドの方に、あたしとやもりと伊月のチーム申請していたから！ アンタ上級になれたでしょ？ だからチーム組めると思ってさ！」

なんて嬉しい言葉をわたしの耳に突っ込みながら、かさねたんは笑う。可愛い、明るい笑みを浮かべて。その笑みにつられて笑い、かさねたんに頭を撫でられる。伊月くんの方を見れば、クスクスと笑われる。二人の反応に顔を赤くさせつつも、笑顔を浮かべる。

「よっしゃ、んじゃあ明日も会えるよね？」

「ああ、俺はいいぞ。いつでもフリーだ。今日も夜なら予定が空いている」

「あたしもあたしもー！」

なんて、三人でそんな会話を交わしつつ笑いあって、飲み食いしつつギルドにしばらく滞在した。

他愛もないことを話し合ったり、馬鹿なことしあったりして、時間を忘れながら楽しんでいた。一秒たりともこの小さな幸せを逃さないように。

*

かさねたん達と約束をしてから家に帰り、ごろごろしながらパソ

コンをいじったり漫画を読んだりアニメを見たりする。魔法が発達して、科学が衰退している場所だけれど、パソコンやテレビぐらいの電化製品なら地上からの輸入物として安易に入手できる。だからこのおそらのうえはおそらのうえなりに暮らしやすかったりする。

相棒の妖精であるマギカと時折会話をしながら、パソコンの掲示板に書き込んだりサイトを巡ったりする。そんな時に、ある書き込みに目がいった。

「……マギカ、こっち来て。これ、何かな？」

「なんだい、やもり？ ……それは……今日行った怪物の居た地区
魔界地区にある、鏡だね」

「鏡？ それが一体どうしたっていうの？」

「……あまり言いたくはないんだけど、そのうち知ることになるから早めに行っておこうか。実はそれは魔界^{まかい}へと繋がる鏡なんだ。だからあの地区は、魔界地区と呼ばれているんだよ」

そうなんだ、なんて、軽い言葉を返しながらも、それ以上は踏み込まないようにしようと心に決める。けれど その鏡の向こう側には、いつてみたいと思った。持つちゃいけない感情なんだろうけど、持ってしまう。好奇心という感情。今は、今だけは、その感情が凄く怖く感じた。

「マギカ、ありがとう。それ以上は言わないで平気だよ」

「わかったよ。……知りたくもないことを教えてしまっていたなら、ごめんよ、やもり」

「ううん、へーき。こっちこそ無理に聞いてごめんね」

しゅんと縮こまりながら答えるマギカに苦笑いをしながら、言う。子犬のような、仔猫のようなその妖精のその仕草に胸を射抜かれたような気がしなくもない。

マウスを動かす右手の近くに座ったマギカの頭を左手で撫でながら、しばらくその掲示板を眺める。気になるような書き込みがあれば、それらを全部コピーしてメモ帳機能を起動させ、貼り付けたりして

保存しながら。

さっきのマジカの言葉がずっと、わたしの頭の中で響き続ける中、パソコンを終了させ、ベッドに倒れ込む。

もう今日は疲れたから、寝ようかな、なんて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0201w/>

魔法少女 まじかるやもり - おそらのうえのものがたり -

2011年10月7日08時13分発行